



真木太一著

風を読む

—農業と暮らしのなかの風—

財富民協会 1990年1月刊

188頁, 1,200円

本書は風と農業とのかかわり、暮らしのなかにおける風について記述された役立つ実用書と言えよう。風は我々の生活と深くかかわり合っており、真木氏の長年の豊富な体験に基づいて風との直接的、間接的な関係を風の功罪の両面からの対比に心を配りながらその応用・利用から防災に至る技術体系の確立まで詳しい記述がなされ、ここに気象学の応用現場を見る思いがある。

風に対する基本的な知識、風を理解するための考え方が図や写真を交えて分かりやすく具体的に説明され、これまで出版された風に関する書物の多くが難解で専門的に偏り過ぎるきらいがある中でだれもが平易に理解できる入門書としても貴重である。しかも、人間社会に於ける風の利用、応用から風の被害対策に至るまで実に幅広く取り扱われており、常に精力的に仕事に打ち込まれている努力家の真木氏を髣髴とさせるものがある。氏の豊富な研究体験がこの著書を何よりも説得力のあるものとしており、研究者としての意欲をここに読み取ることが出来る。

現象を記述したり理解させるにはいくつかの道具建てが必要であるが、著者はここで観測事実をもとに風の諸相とそのからくりについて解説を試みながら、これらを手だてとしてこれまで難しいとされていた農業の中に於ける風に対する認識を気象学・農業気象学に携わる分野に促そうとしているのであろう。それ故、話しは風の生かし方、防ぎ方にまで及び、風に対する技術体系の確立を目指した現実に即応したもので、きわめて示唆に富む内容で利用価値の高いものとなっている。

本書の構成は次のようなものから成り立っている。

1. 農業における風の功罪

風の功罪について風がある場合と無くなった場合のプラス、マイナスの効果を主として作物を媒体にして農業

と関連づけながら記述している。

2. 農業生産に及ぼす風の影響

農業に及ぼす風の影響について日本各地の風の特性とこれらを利用した栽培事例を紹介。中腹温暖常の気候資源を利用した栽培、南極での斜面下降風の紹介、同じ風でも地域によってはプラスになったり、マイナスになったり作用して風の資源をいかに有効に利用することが大切であるかを理解できる。

3. 地球規模の風と田畑の風はどうして吹くのか

地球規模の風から局地風、農業を行っている水田や畑の作物周辺の微細風に至るまでの広範囲の風の特性が簡単に述べられている。

4. 風を読む

風を測ることから始まり、局地風（海陸風、湖陸風、山谷風、フェーン、ボラ）、農作物に被害を与える三大悪風（清川、広戸、やまじ風）、冷害を起こす偏東風（やませ）を地形と関連づけながら説明。さらに裸地や耕地上での風の特性が著者の研究の成果を織り混ぜながら簡単に述べられている。

5. 風の生かし方

防霜ファン、シイタケ栽培、養畜業、農薬散布、温室、風力エネルギーなどの風の利活用の事例を紹介。すなわち、微気象の調節、改良とその利用に至る技術体系の確立がなされており気象学の応用現場をここに見る。

6. 風の防ぎ方

強風害、冷風害、フェーン風害、寒風害、潮風害などの防ぎ方について対策事例を紹介しながら記述。著者の長年の研究成果が数多く盛り込まれ、防風対策技術の確立に情熱を傾けた著者の並々ならぬ意気込みを感じる章である。

図の中の記号とその説明文の不一致（図42）や概念としての渦のスケールのとらえ方に不統一など気になるところもあるが、何よりも本書は独自の発展を見せる農業気象学の世界の一端を風を通して示しており、気象学を専門とする分野の方にも益する面が多いと思われるを薦める。

（山口大・農 早川誠而）